

文豪の「病み」

死や欲望に呑まれていく者の
狂おしさ
文豪が叫んだ

「退廃的、病み」

『ドグラ・マグラ』夢野久作

「……ハア……焚き殺すのが
その頃の治療法だったのですね」

夢野久作の代表作であり、日本探偵小説“三大奇書”的ひとつにも数えられる作品。舞台は九州帝国大学医学部精神病科。その独房に閉じ込められている精神病患者は、記憶を失っていた。そして、徐々にミステリアスな事件の真相が明らかになっていく。

『みずうみ』川端康成

「一度おかした罪悪は
人間の後をつけて来て罪悪を重ねさせる」

“美しい女の後をつける”という性癖を持ち、その衝動はどうしても抗えない銀平。幾人の女の後をつけるうちに、銀平は自身の過去と向き合うことになるが——。現代で言う“ストーカー行為”をいち早く文学に落とし込んだ、川端康成の淫靡な世界が広がる。

名作の中の病
岩波明

精神科医が読み解く
名作の中の病

岩波明 新潮社 1300円(税別)

古今東西の作家たちが生み出した
名作。それらに登場する人物たち
を架空診断。あの主人公の意外な
精神状態が明らかに!?

いわなみ・あきら ● 精神科医
『天才と発達障害』など著書多数

自身の精神状態を如実に書き記し
た芥川。彼のような作家にとって、
書くことは、自己救済といえる行
為だったのだろうか?

「それは逆でしょうね。苦しみやコ
ンプレックスを文章に残せば、それ
が記憶として脳に固定化されます。
すると、延々と苦しみ続けることにな
る。人間は忘れることで楽になれ
る生き物ですから、それでも、彼ら
がなぜ苦しみを作品に書き記したの
か。それは、なによりも、書くこ
とが大切だったからでしょう。大勢
の人々に評価され、後世に読み継がれ
る作品を残したい。そのためならば
地獄に落ちたとしても、身を滅ぼし
たとしても構わない。そんな強い覺
悟を感じます。不幸な最期を迎えた
文豪が少なくなったのは、自らの人生
よりも小説を優先させたことの証左
だといえるかもしません」

新潮文庫

みずうみ
川端康成

歯車
芥川龍之介

李陵山月記
中島敦

檸檬
梶井基次郎

心の深淵を覗き込んだとき、
人はどうなるのか 文豪が見つめた

自意識の病み

太宰治

人間失格

春馬車は
乗つて

機械

1
『人間失格』太宰治

「恥の多い生涯を送ってきました」

周囲の者たちと相容れない感覚を持つ葉蔵。それを悟られまいと道化を演じる彼は、次第に心を孤独感に蝕まれていく。屈折したまま大人になった葉蔵を待っていたのは、「人間失格」という負の烙印だった……。言わずと知れた、太宰治の代表作。

『機械』横光利一
「誰かもう私に代って
私を審ってくれ」

ネームプレート製造所に勤務する男
たちの、心の揺らぎを描いた短編小
説。無機質な機械に囲まれ作業を続
けるうちに、「私」は「私」を見失
っていく。そして、突然訪れた同僚
の死。彼を殺したのは誰? 自意識
を喪失した「私」には、もはやそれ
すらわからない。

文豪たちの名作のなかには、孤独
や絶望、抗いきれない背徳的な欲望
などを表現したものも多い。それら
は現代的な言い方で表現すれば、病
んでいる。作品だ。ともすれば、著
者の精神状態をも疑ってしまいそう
になるが、精神科医の岩波明さんは
冷静に分析する。

「病みの深い作品を書いたからとい
って、それを著者と同一視はできま
せん。たとえば、「ドグラ・マグラ」
は「奇書」と評されますが、夢野久
作がおかしな人だったとは言えない。
むしろ、精神科医の視点で読んでも
細部までリアルに描写されていてる
とか、彼が緻密に計算をし、技工
を凝らして創作していたことがわ
ります。「人間失格」を書いた太宰
治だって、作中では自意識に苛まれ
る描写が出てきますが、本人は至っ
てまともな人。恋多き人ではあった
みたいですね。だから、彼らが
作品に自己投影をしたとは言い切れ
ないです。むしろ、それは別もの
として楽しんだほうがいいでしょ
う」

4
『山月記』
中島敦

「一体、獸でも人間でも、
もとは何か他のもの
だったんだろう」

旅の途中で「人喰虎」に襲われそう
になった哀惨。しかし、寸前で虎は
茂みに隠れてしまう。そこから聞こ
えてきたのは、旧友である李徵の声。
なんと、虎の正体は李徵だったのだ!
肥大した自尊心に呑まれてしまっ
た、ひとりの男の悲哀がそこに。

「芥川龍之介はうつ病だったんです。
眠れず、食欲もわからず、やせ衰えて
いく。その治療のために睡眠薬を処
方されていたんですが、当時の薬は
品だという。

「芥川龍之介はうつ病だったんです。
眠れず、食欲もわからず、やせ衰えて
いく。その治療のために睡眠薬を処
方されていたんですが、当時の薬は
品だという。

2
『檸檬』梶井基次郎
「なぜだかそのころ私は
見すばらしくて美しいものに
強くひきつけられたのを覚えている」

精神的に不安定で、常に不吉な予感に苛まれていた「私」は、ある
日、果物屋で檸檬を手に入れる。生を象徴するようなみずみずしい
果実を手に、向かったのは丸善。そこで「私」は、爆弾に見立てた
檸檬を置き捨て、丸善が爆破される想像に浸る。

3
『機械』横光利一
「誰かもう私に代って
私を審ってくれ」

文豪たちの名作のなかには、孤独
や絶望、抗いきれない背徳的な欲望
などを表現したものも多い。それら
は現代的な言い方で表現すれば、病
んでいる。作品だ。ともすれば、著
者の精神状態をも疑ってしまいそう
になるが、精神科医の岩波明さんは
冷静に分析する。

「病みの深い作品を書いたからとい
って、それを著者と同一視はできま
せん。たとえば、「ドグラ・マグラ」
は「奇書」と評されますが、夢野久
作がおかしな人だったとは言えない。
むしろ、精神科医の視点で読んでも
細部までリアルに描写されていてる
とか、彼が緻密に計算をし、技工
を凝らして創作していたことがわ
ります。「人間失格」を書いた太宰
治だって、作中では自意識に苛まれ
る描写が出てきますが、本人は至っ
てまともな人。恋多き人ではあった
みたいですね。だから、彼らが
作品に自己投影をしたとは言い切れ
ないです。むしろ、それは別もの
として楽しんだほうがいいでしょ
う」

岩波明
精神科医
インタビュー